

学位請求論文 吳進幹『臨濟禅の思想史的研究 ―その形成と展開―』

審査日 2019年 12月 21日

審査員 中島志郎(花園大学・主査) 程正(駒沢大学) 小川太龍(花園大学)

総評要旨

吳進幹氏(花園大学大学院博士後期課程 仏教学専攻)の「臨濟禅の思想史的研究 ―その形成と展開―」は 唐代禅宗思想史的研究を馬祖道一以後の禅宗の展開に沿って臨濟義玄の登場に至る禅宗の思想の変遷として理解する課題としてきた。

序論以下 前編 臨濟禅の思想史的背景 第一章から第六章、後編 臨濟義玄の禅思想とその後の展開 第七章から第九章まで の二編九章からなる。

前編の中心課題は

第一章 唐代禅思想の基調

第二章 中晩唐転換期禅宗における馬祖「作用即性」説の流行と反省

第三章 大珠慧海の禅思想 ―馬祖禅の継承と展開 第一

第四章 南泉普願の禅思想 ―馬祖禅の継承と展開 第二

第五章 百丈懐海の禅思想 ―馬祖禅の継承と展開 第三

第六章 黄檗希運の禅思想 ―馬祖禅の継承と展開 第四

唐代禅思想の基調を作った馬祖道一の禅思想を「作用即性」説として理解し、その定礎の上に唐代禅思想の中心人物達を「作用即性」説の継承と発展、あるいは批判として、禅者の個別の特徴を把握することに努めた。

第三章 大珠慧海の禅思想以下、第六章 黄檗希運の禅思想まで、禅者各自の個性に従って、馬祖禅の継承にも特徴と相違があることを語録や禅籍の具体的記述を挙げて引証しようとしている。いずれも馬祖以降の唐代禅宗を代表する禅者であり、馬祖禅の継承は教学仏教の教理の継承とは異なって、各自の独立独自性を発揮しつつ自覚的に法燈を継承するという、禅宗の特徴を発揮した存在である。論文の叙述は、継承と独自の発展という視点で一本の系譜として描き出そうとしたのだが、方法的に一貫した叙述にしようとした苦勞を窺わせるが、個別の語録の問答や示衆という具体的な説示を、視点に沿って思想的特徴を破綻なく整理することは若干、無理な印象も残った。豊富な引用例を縦横に駆使して、従来研究を踏まえた新解釈を提起できたのだが、個別言句の解釈に拘わることであり、解釈の分かれる難題も指摘でき、その引用の解釈を通して一貫した思想の系譜を描こうとした点には、いくつか難点と疑問が残る点もあった。

続く後半部は以下の章からなる。

後編 臨濟義玄の禅思想とその後の展開

第七章 臨濟義玄の禅思想

第八章 臨濟禅の南方伝播と臨濟宗の形成 —五代宋初における臨濟禅の動向

第九章 『臨濟録』における臨濟宗綱要の形成 —「三玄三要」「臨濟三句」「四喝」「四料簡」を中心として

後編では、馬祖禅の批判的継承と独自性の発揮という問題設定を臨濟義玄の運動にまで敷衍させて、唐代禅宗運動の本流の特徴を一貫した主題で理解することに努めた。特に第八章 臨濟禅の南方伝播と臨濟宗の形成は、歴史的考証という視点から、五代宋初という時代限定を設定して、歴史地理的に臨濟禅の動向を追跡して湖南地方という中国南部の禅宗の動向を詳論した。これは臨濟宗の形成に実証的な目途を立てた点で、本研究の特徴ある成果のひとつに挙げることができる。この臨濟宗の歴史的形成過程の追跡と連動する形で、第九章では『臨濟録』の文献考証的な研究を加えて、古来、臨濟禅の思想的標語として知られる「三玄三要」「臨濟三句」「四喝」「四料簡」といった成句に文献考証的方法で形成過程に実証的な追跡を加えた。この研究に於いて臨濟禅の成句もまた、臨濟その人の思想と云うより五代北宋時代、臨濟宗形成期の臨濟禅綱要の形成と密接な関連を持つことを明かした。これも『臨濟録』の文献考証的な研究の成果として特筆して良いもう一つの研究成果である。

以上、問題意識と研究方法の一貫性は高く維持されているが、それゆえか論述や表現の反復もしばしば指摘された。説明不足の箇所の加筆と共に、あらためて最終的な推敲は必要であることを確認した。

中国唐代禅宗思想という禅宗研究の中核部分を課題とした以上、広範囲な先行研究の検討に大きな労力を割かざるを得なかったと云う点は十分に理解できるが、研究全体の論点の膨らみには欠けるという意味では些か恨みを残す。

総じて中国唐代禅宗祖師たちの思想という大きな課題設定の下で、馬祖禅以降の禅思想の顛末を見届けるという課題意識は一貫しており、今後も宋朝公案禅の歴史的展開の研究につなげてゆくという点でも大きな礎となったと云える。

核心的課題に果敢に挑戦した学的態度は評価してよいし、本研究を通して蓄積された膨大な知識と学識の研鑽を大きな財産として、将来に一層の飛躍を期待できるという認識でも審査は一致を見た。以て本研究を博士号学位請求論文として妥当であると結論した。

(文責 中島志郎)